

# 第八十回六甲会（令和七年四月四日）

## 稲畑廣太郎選

兼題「囀・別れ霜」その他当季雑詠

### 第一句会入選句

土起し準備万端別れ霜

主なく鎖されし庭に囀れる

囀や児ら集団の登下校

枯枝のてつぺん青く囀れり

快晴の霜の名残の朝となる

○囀もシンメトリーに平等院

別れ霜貨物列車の長き音

夕星にふと問ふ別れ霜のこと

囀や浪速万博九日後

うかつにも金の成る木に忘れ霜

○早発ちの朝のかがやき別れ霜

蔵町の甍ほのかや別れ霜

囀や杜の黙解き透きとほる

日捲りの分厚き影や別れ霜

さへづりや斜めに零す竹の径

山河今日波長ととのひ別れ霜

囀や人のはなしが上の空

転勤の車窓に霜の名残乗せ

○囀の尖りに風の歪みゆく

突然の別れ霜あり訃報あり

囀の風を揺るがせ湖の朝

山の木々囀に揺れ風に揺れ

鎮もりて白む山里別れ霜

囀や岩屋の崖の忘れ潮

囀や瑞枝に遊ぶ瑠璃の影

囀の起承転結ラブレター

哀史秘め霜の名残の吉野山

牛の背を流し糶へと別れ霜

師を偲ぶ心の窓辺囀れり

囀や中には愚痴をこぼしをり

囀や風が優しく指揮をとる

別れ霜心やうやく切り替はり

○野に山に瀬音戻り来別れ霜

戸を練れば庭のさへづりちらばりぬ

虚子館は五七五と囀れり

さへづりやたちまち居間を楽堂に

囀に巡る彫刻美術館

情淡き島の乙女や別れ霜

二度三度重き鉢植多別れ霜  
囀とともに日差の届きをり

別れ霜光り傾れて湖光る

別れ霜過ぎて二人は結ばれる

囀や六甲山は若き山

囀を聴く切株の特等席

囀や旅の計画着実に

囀の下のこころの軽さかな

太陽の下の求愛囀れる

囀れる時にてにをは時に切れ

手を抜けぬ畑の養生別れ霜

○始発駅乗客二人別れ霜

首たれて歩く姿に忘れ霜

別れたる筈に又もや別れ霜

産土の杜囀に膨らめり

万象の動き初めけり別れ霜

囀を練り込む峽の土ひねり

別れ霜静かに降りて消えにけり

師の庭の一隅愁ふ別れ霜

吹き返す霜の名残の大地かな

子らはもう近くて遠き別れ霜

喧嘩かと思へる程に囀りて

囀や心の奥の吐くことば

囀や鳥も晴天好むらし

囀や静寂広がる長者村

囀るや吾思春期のだ真ん中

囀や元気な声の下校時

囀のどこかは喧嘩やも知れぬ

○別れ霜黒点となる田の鴉

別れ霜町なかの畑錠解かず

囀や枝のびやかに大空へ

○神よりの伝言乗せて囀れる

紅ほのと路傍の草の別れ霜

畔を行く賢治の背中忘れ霜

囀や風にメロデー乗せ四方へ

囀や天衣のごとき雲をおき

遠近のさへづり祖母の家近し

日時計の影の長さや別れ霜

陽炎を出て新しき影を持つ

○囀や二人に会話いらぬとき

松村咲子

辰巳昌彦

辰巳葉流

辰巳葉流

奥野千草

室田妙子

徳永由起子

三好ようこ

多田羅紀子

山之口倫子

河辺さち子

一坪信舟

松若英理子

中嶋陽太

河辺さち子

徳岡美祢子

田邊育子

蔭山夢宙

田邊育子

谷本房子

平尾孝子

鎌野光子

黒田千賀子

中島庸子

徳永由起子

中本 宙

森岡喜恵子

室田妙子

室田妙子

奥野千草

小林志乃

西脇英恵

多田羅紀子

奥田好子

田口ひさえ

小林志乃

山村千恵子

北上美佐子

北上美佐子

辰巳葉流

歳三の五稜郭なり別れ霜

プリプリのMを聴くとき別れ霜

轉の大樹を離れたる一羽

上京や霜の別れの山越えて

昨夜無風晴天となり忘れ霜

学舎は中腹にありさへづれる

青空に音符を拾ひ轉れる

束の間の轉に杜ふくらめり

轉のあとのしじまの深さかな

別れ霜友と最後の通学路

気に掛かる借り農園や別れ霜

波音のつと尖り来る別れ霜

○ふりそそぐ轉に樹々黙したつ

さへづれるそぞろ歩きの芦屋川

白まざる霜の名残の富士の山

このあたり縄張りだよと轉れり

轉の主透し見る大櫛

膨らめる蕾に霜の別れかな

別れ霜降りし大地の静けさよ

別れ霜一人暮らしの始まれり

縄張りは天守も入れて轉れり

別れ霜先手を打つて苗覆ふ

別れ霜明けの明星育ちゆく

思はずも旅の目覚めに別れ霜

別れ霜故郷に別れ告ぐ朝

海光のあふるる苑をさへづれる

杜深く轉が径ひらきけり

別れ霜星の欠片となり消ゆる

別れ霜未来へ紡ぐ賛歌かな

轉や幸せ呼んでゐる狭庭

轉に触れて心の軽くなる

○天上の響きとなりて轉れる

◇ ◇

(廣太郎先生出句)

タイガースしつかりせよと轉れる

轉や吉野の記憶遠ざけて

庭師来るより轉の昂れり

農曆少し戻して別れ霜

別れ霜大地奏でるレクイエム

第二句会入選句

轉に心ゆるみし歩でありし

別れ霜口あく幼齒の増えて

精霊のタクト躓き忘れ霜

野辺に置く別れ霜こそいとあはれ

轉の波寄すリズム光る浜

早立ちの赴任の朝の忘れ霜

売物にならぬ菜霜の名残かな

轉のまつ只中の山家かな

○別れ霜ありて大地の動き出す

深刻なはなし轉ほぐしくれ

別れ霜教はる畑の赤き土

霧島の空の轉三重奏

轉や音符にすればソフアラシンド

聴覚を擦り通し轉れる

○初恋の再会は憂し別れ霜

朝刊を入れて去りゆく別れ霜

相愛の切つても切れぬ別れ霜

忘れ霜少し忘れて美しき恋

轉や答ふる声の裏手より

轉をこぼす里山歩す日和

○ゆるみぬし気の引き締まる別れ霜

轉や六甲の端山脈はへる

別れ霜仔牛に藁を足してやる

朝光にポエム一篇轉れる

轉をこぼす老樹の膨らみて

轉や青葉の笛を守り継ぎて

轉や心弾ますビブラート

○轉やロダンの漢動かざり

ふと思ふ死後の長さや別れ霜

○空替へてまた轉のひとつしきり

恋焦がれ今宵一夜の別れ霜

日を返す畝の畑薫別れ霜

米びつを満たしさへづり聞きに出づ

綺羅星のひとつつづつ消え別れ霜

千年の杜のすみずみ轉れる

○別れ霜黒板に混む農事メモ

轉や声ふらせつつ天空へ

別れ霜花壇は色の満ち溢れ

菅笠や富士の裾野の別れ霜

林 曜子

辻田あづき

玉手のり子

前出公子

奥山登志行

槌橋真美

小柴智子

田村惠津子

高木雅恵

柄川武子

田中由子

南波喜久子

高橋純子

本郷桂子

高野さち

道中義臣

奥山登志行

吉田知子

辻田あづき

前出美千子

南波喜久子

田中由子

藤井啓子

前田容宏

新田佐代子

高橋純子

柄川武子

酒井湧水

生澤瑛子

田附光映

道中義臣

北井真有美

岩鼻絹子

田村惠津子

小柴智子

林 曜子

前出美千子

辻田あづき

吉田知子

轉や今日は善行積みさうな  
別れ霜どこか寂しく鳥のこゑ  
各各の命の賛歌轉に

槌橋眞美

里山の神のいたづら別れ霜

前出美千子

轉の下には車止めるまじ

新田佐代子  
奥山登志行

轉の森を出るより風の音  
廐舎への轍に銀の忘れ霜

本郷桂子

俳傳を祝ふが如く轉れり

高橋純子

夢の夫やがて消えゆく別れ霜

酒井湧水  
高橋純子

主なき庭のさへづり四句節

道中義臣

◇ ◇  
(廣太郎先生出句)

○丹精の葉先を焦がし忘れ霜

岩鼻絹子

佛を大地に宿し別れ霜

別れ霜遺愛の鉢を家内へ

本郷桂子

窓辺よりシヨパン庭より轉れる

時隔つ天の結界別れ霜

玉手のり子

忘れ霜昨夜の星屑鏤めて

山宿の霜の名残の泊りかな

柄川武子

別れ霜君と別れし日は遠く

四月よりごみ回収は午後となり

高木雅恵

轉や館の歳月紡ぎゆく

別れ霜祖父の直感働きぬ

藤井啓子

農具もち霜の名残の畔ならず

田村恵津子

ひと入れぬ離宮の森に轉れる

湧き上がる轉四方の山揺らす

玉手のり子

生澤瑛子

轉や応へてくるる羽ばたきも

林 曜子

○陸奥能登を前へ前へと轉れる

前出公子

はからずも今朝の静けさ別れ霜

高野さち

枝枝に恋の鞘当て轉れる

前田容宏

轉や天へ祈りの届きたる

新田佐代子

別れ霜風の日差しの伝へ来る

北井真有美

轉を誘ふ口笛六甲の山

道中義臣

日の差して緊張解きし忘れ霜

田附光映

ウイーンへと飛び立つ人や別れ霜

岩鼻絹子

蟹町に残る菓子舗や轉れる

高野さち

轉を樂とし神前挙式かな

玉手のり子

百花咲く苑の戸惑ひ別れ霜

小柴智子

轉や司教とともに持つ句会

藤井啓子

ビブラートきかせ轉ひろげゆく

田村恵津子

轉や森のプリズム奏でさせ

吉田知子

万博を祝ふ浪花の花八分

柄川武子

轉や応へてほしき人在さず

田中由子

○轉や森の扉を開け放ち

田村恵津子

とりどりの供華育つ庭別れ霜

田中靖子

さへづりにミサの鐘の音加はりぬ

岩鼻絹子

○轉の下に貼り出すクラス分け

藤井啓子

乙女座の別れ霜跡さそり座に

奥山登志行

惑ひたる季節のはざま別れ霜

新田佐代子

◎次回第81回六甲会は令和7年6月6日(金)開催です。  
兼題 万緑・夏の蝶